

平成19年度 第4回豊田市生涯学習審議会 会議録

【日時】 平成20年3月21日(金) 午後2時～午後4時

【場所】 豊田市生涯学習センター保見交流館 大会議室

【出席者】 (委員) 久米昭次郎(市民公募委員)
齊藤秀平(愛知教育大学教授)
佐藤勇恵(豊田市区長会)
清水智子(小学校読み聞かせサークル)
鈴木八枝子(交流館長代表)
早川清光(まちづくりグループ)
福士範行(青少年健全育成推進協議会)
福島紀美(学識経験者)
藤嶋正美(学識経験者)
牧野 篤(名古屋大学教授)
松浦 崇(市民公募委員)
松元秀喜(市民活動グループ)
山中裕二(小中校長会)
吉田允昭(学識経験者)
(事務局) 畔柳寿文(生涯学習課長) 大地一成(生涯学習課副主幹)
鈴村博之(生涯学習課係長) 竹内未帆(生涯学習課主査)
小林晃朗(生涯学習課主事)
(欠席) 釘宮順子(フリースペースK代表)
田中清恵(子育てネットワークの会ふじおか)

【次第】 1 あいさつ

2 議 事

- ・地域活動を支援する交流館に向けての取組状況について
- ・交流館図書室のあり方の検討について

3 連絡事項

- ・平成20年度愛知県社会教育委員連絡協議会

西三河支部事業計画(案)について

【議事の摘要】

1 あいさつ

会 長：こんにちは。今日は、生涯学習システム機構の課題と今後のあり方についてと、交流館の図書館のあり方について議題に予定されています。今年度は東海北陸地区の社会教育研究大会が江南市で開催され、豊田市からは松浦委員、久米委員が生涯学習のシステム機構のあり方についての事例発表をしてくださいました。今後の豊田市民の幸せの為に生涯学習審議会がどう関わっていけるかが重要だと思います。今日は新築された保見交流館にて審議会を開催しますが、交流館建設については次に逢妻地区が予定されているとのことです。また、先日、プラネタリ

ウムがリニューアルされ、私は内覧会で見学させていただきましたが、迫力があり本当にすごいなと思いました。市民の皆さんにもぜひみていただきたい施設ですし、なんらかのかたちで、社会教育委員のみなさんにも見学する機会を作っていただきたいと思います。では、よろしくお願いします。

生涯学習課長：こんにちは。本日は、新・保見交流館にお越しいただきありがとうございました。昨年11月にこの館がオープンし、その状況も肌で感じていただきたいという事で会場を変更させていただきました。

この3月1日に「市民の誓い」30周年を記念して“あったかフェスタ”が開催されました。市内全域から、いろんなグループや団体、行政機関など、多くのブースが出展され、改めて豊田市の市民力が徐々に上がってきつつあることを感じた次第です。こうした市民力に関わる支援を生涯学習の立場として今後どうしていくのかが、引き続き私どもの課題だと思っています。今年一年、特に都市内分権の仕組み作りと並行しながらそれに基づいて、生涯学習の分野でも交流館を中心とした地域づくり支援が重要だと考えて、交流館体制、環境整備について事務的に協議を進めてまいりました。引き続き皆様方の知恵とご協力をいただきながら、生涯学習が果たせる分野の施策を構築してまいりたいと思っておりますのでよろしくお願いをいたします。

2 議 事

・地域活動を支援する交流館に向けての取組状況について

事務局：資料をもとに説明。

会長：交流館の取組を説明いただいたが、各館工夫を凝らして良くやっていると思います。市町村合併があつて、色々と温度差もあるけれど、こういう活動を進めていくと、豊田の地域活動の支援に繋がっていくというご意見を委員の皆さんからいただきたいと思います。

事務局：今回の資料の中にある、若林交流館の“若林ネット”について鈴木委員からご説明をお願いします。

- 鈴木委員 説明 -

会長：交流館から、活動の輪を徐々に広げて、地域のいろいろな課題に迫っていきたいという若林交流館のご発言だったと思います。これを踏まえてのご意見をお願いします。

委員：以前に旧町村の交流館を全部回らせていただいたとき、都市内分権が進んで、恐らく一番戸惑っているのは、旧町村だと思いました。今まで行政から手厚く色々な形で行政サービスをしてもらっていたのが、合併後は、住民自身がいろいろな地域課題に取り組んでいかないといけなくなってきたことに戸惑いがあるのかなと感じました。旧市内の交流館ですと、住民自身が積極的に地域活動を行なうことができつつあるところもありますが、旧町村地区で一気にその状態になる

というのは難しい所もあるでしょうから、まず交流館に来ていただくことが必要だと思えます。来ていただいて、旧市内の色々なノウハウ学びながら、地域課題を支援し、解決に向けて動いていくという道筋が必要なのですが、お話しを聞いていて利用者増や、その他の取組からその道筋で動いているように感じました。基本的にはこの方向で動いていただければ良いかと思っています。

委員：各館とても努力していただいている、成果も上げてらっしゃるので良いと思えます。ただ先程の研究機能等を含めての課題ですが、例えば小規模コミュニティの意識化・自立化という時に、私たちが調査に入らせていただいて一番心配したのが旧市内の地域でした。例えば福祉団地化、外国人の集住地域など、特別なケアが必要な地域が出始めているので、その対処が課題です。また、民生委員さんが自分の生活を犠牲にする位、苦勞されていますので、その対処も考えなければならぬと思えます。もう一つには、合併町村側も限界集落と言われるように、急速に過疎化が進んでいる地域もありますので、そういう意味では、地域会議をきっちり機能させていくための基盤としても小さなコミュニティ、組やその下の小さい寄り合いをどう活性化するかという議論もしなければならぬだろうと提案させていただいております。調査報告で“いきいき豊田事業”という提案をしましたが、住民の生活基盤を安定させることを考えなければならぬと思えます。また交流館の機能でも、都市内分権の安定的な形成といったケアを考えていかなければならぬと思えます。例えば、地域をケアするためのコミュニティ主事というような方々を地域ごとにおく必要があるのかもしれませんが。もう一つは、生涯学習システム機構との関わりもありますが、例えば交流館の位置付けをある種のまちづくりや総合行政的な分権も絡めて、機能が発揮できるようにしていくという事が必要ではないかということです。その中で例えば福祉関係、子育てとか、高齢化に対応できるような機能のある程度持たせられないかと思えます。合併町村の方でも過疎が進み、豊田市まで出て来られる人々と出たくても出て来られない人々という形で格差が広がってきています。こうした格差に対し、交流館が、豊田市内や日本全国などと自分たちの地域とで連携をとりながら、まちおこしに貢献できるような機能を持てるかどうかということもあります。元々、「公民館」というのは産業形成機能を持っていたのですが、経済成長をしていく中で無くなってしまったのですが、今もう一度、新しい時代に入っていくながら、そういう機能を持たせる事ができるかということがあります。

世界的には日本の伝統工芸に対してとても関心が高まっていて、小原の和紙などは国外に欲しがる地域が多くあると思えます。生涯学習システム機構が持っている調査研究機能と各行政のセクションと連携機能を活用して、例えば伝統工芸と輸出産業を連携させて動かすような事業に向けて調査・研究・実施につなげるような展開ができるのではないかと考えています。その仕組みの中で、人が食べていけるような事業、個人に還元されるような機能をどう持たせられるかというようなことを含めて考えていくときに、交流館の機能や都市内分権をより確実な

ものにできるのではないかと思います。

会長：ありがとうございました。海外との関わりや産業形成なんて言葉はおよそ僕の交流館の発想の中にはありませんでしたが、身近な活動では小原の和紙とか、キノコ作りなどがある訳ですね。今の交流館の取組については、全体的には良い方向へ行っているとお考えになりますか。

委員：交流館の現場の方々の実感はいかがですか。市民の方々が積極的になってきているという実感があればそれは成功だと思いますが。

委員：市がやっていることを、住民と一緒にやっというということになると、時間やコミュニケーションなど、目に見えないものがが必要です。交流館がただ企画するのではなく、市民たちが主役になり、交流館がその縁の下を支えるという形にしていくためには、目に見えない信頼関係を作らなければならないと思っています。主事の中には、そのことにやりがい感じている者も数多く育っていますし、上手くやれているのかなと思っています。

もう一つ感じているのは、色んな人たちが育って来ていて、交流館以上の事ができる人たちもたくさんいらっしゃる事です。交流館を支える、サポートみたいな事ができる人たちも育ってきています。自分たちで企画したいという人も増えてきています。主事たちがこういった人たちをどうコーディネートしていくかですが、地域の課題を解決する為には時間がかかり、日常業務も含めると時間的に厳しくなってくるので、そこを少し補えるようなシステムができていくとそういう人たちが自立して活動できますし、交流館がそこまで係わらなくてもやれると思いますし、現場が活性化していくのではないかと感じています。

会長：今のような動きが各地域で交流館を中心にして行われていけば、交流館が活性化され、簡単には言えないかも知れないけど、地域とか海外とかとの交流につながったりということが想像されます。

委員：今の交流館の職員体制が、オールマイティーな仕事をしなければいけないという事で、体制上からも職員の専門性の向上にはつながらないような状態で、これも問題だと思います。コミュニティ会議でもある程度自立したコミュニティ活動ができていのに、交流館が係わっていく部分が増えてしまうと、せっかく自立した部分が少し後退していくんじゃないかなと私は思います。

委員：私は末野原交流館で子育て関係と子どもの本に係わり、ボランティアや小学校では図書館司書のような仕事もさせていただいています。今、末野原交流館では交流館主事と、子育てサロンのサポーター、託児グループ、子どもの本の読み聞かせグループ、民生委員さんが一緒になって子どもの本の環境を整えようとしています。主事さんを中心にグループが集まって、本の配置換えをやったり、お薦めの本にシールを貼って分かり易くしたりというような活動です。こうやっていくつものグループが一緒になって活動をするということはこれまでなく、初めての経験です。お互いの信頼関係を作るのに4、5年位の長い年月がかかったので、今後は、主事さんの異動が心配です。

会長：ボランティアの人たちが力をつけていって、主事がかわっても私たちに任せなさいという方向になっていくと活動の高まりを感じますね。

委員：主事時代は自分に集まって来てくれる人が一杯いると嬉しく、それがやりがいだと思っていましたが、今、館長となって主事に言っているのは、あなたが異動して居なくなっても活動が続けられるくらい、自立したグループを育てていくこと、それが仕事だよということです。主事のファンを増やすことでなく、自分が異動しても次の人がしっかり引き継いで活動できるような状態にすること、グループが自立できる形にしていく事が仕事だと思ってやっています。だから主事の異動後も活動はつながっていくと思います。

委員：もう既に交流が始まっているコミュニティもあり、20年度は大々的に移動・交流が進んでいくのではないかと思います。ただ、青少年健全育成推進協議会（以下、青推協という）で言っているのは交流はあくまでも活性化の1個の糊付けにすぎず、実際に活性化にする為には、その次の段階がいるということです。そこでは、市民レベルではなくて、行政の人に係わっていただかないと、本当の意味で合併町村の活性化というのは上手くいかないと、切に思います。もう一点、青推協はコミュニティの代表として、地域会議に入っていることが多いのですが、地域会議とコミュニティ会議の住み分けがよく分かりません。このままだと、豊田市側で育ててきたコミュニティ会議が弱体化あるいは混乱するのを心配しています。私も（仮）市民文化交流センターの会議に委員参画していますが、大学の単位互換よりは調査研究機能を持たせた方が良いなという気がしています。

また、合併町村の心配ばかりしているうちに、旧市内が都市化で空洞化していくのではないかと指摘は青推協の中にもあります。子どもたちで問題を抱えている地域が増えています。だから、合併町村の活性化と一緒にこちらも手を入れてもらえたらなと思います。

委員：中学校長として、高橋交流館には週1度は必ず足を運んでいますし、交流館運営委員会にも出させていただいています。確かに、問題もかなりありますが、高橋交流館そのものの活動は極めて活発で、自分は中学校の校長という立場で参画していますが、中学生、小学生、義務教育段階の子どもを重視して常に取り組んでいます。また、各世代にあった企画をバランスよくやっていただいています。高橋地区では市内で最初に、学校文化祭と交流館祭を合体させたふれあいまつりをやっていますが、若い世代と交流館の運営を一つのテーマにして力を入れてやってくれていると思っています。具体的な活動は非常に中身の多い、濃いものだろうと思います。

委員：交流館で色々自主講座をやるのも結構ですが、問題がある地域もあることもふまえて、コミュニティと交流館が協力して、子どもの居場所作りとかに重点をおいてくれた方が嬉しいかなと思います。

会長：地域の課題解決に向けた支援では市社会部も頭を悩ませているようです。例えば、今後の交流館にそうした機能が求められるのにつれ、仕事の量や内容が増え

てくるのに今の6人の主事さんでやり切れるかどうか、これが一つ問題です。今までの交流館だとこれだけやっていけば良いという考え方だったけど、そこへ、市長さんのいう都市内分権を進めることで、行政まで入り込んでいるとなると、今までの交流館の主事さんだけではいけないし、行政側も交流館の方へ入り込まなければなりません。それに、区長さんもおみえです。区民会館でやって、また交流館で広げていくというのも一つのルートだと思うんですが、とにかく皆地域の活性化、それから地域間同士等に目覚めてやっていけない事にはできていけない世界になって来ました。忙しくなってきたなと思います。

委員：生涯学習フェスティバルの逢妻ふれあい祭では、中学生が毎年80人位ボランティアをしてくれます。一生懸命社会に出て学びたいという事で、お客さんの接待ですとか、鍋や釜などの洗いものを全部やってもらいましたが、一言ありがとうと言いましたらすごく喜んでくれました。社会に出てお父さん、お母さんやあるいは年寄りの方と色々な勉強する事が一番だなと感じました。今年は、企画から入れて欲しいという宿題をいただいています。交流館とコミュニティ会議とそれから学生さんの連携ですね。そんな事ができたら良いなと思っています。

会長：こうした活動が連なっていくと、自立した地域活動になっていくのかと思います。最初は、役割を割り当てられて仕方なくやっていたけど、それが離れがたいような気持ちになってくると良い地域ができるんじゃないかなと思います。

委員：上郷支所では、昨年度まで支所長が交流館長を兼務していたが、今年度から交流館長は別の人に代わりました。館長と支所長が分かれた事が支所との結び付きを薄めているという思いもします。これは地域によってまちまちと思いますが、地域会議と支所と交流館との連携強化というのはどういう形でおやりになるうとお考えでしょうか。

事務局：上郷の支所長の地域会議エリアは、上郷交流館と末野原交流館の2つです。したがって支所長が上郷交流館長を兼ねれば、一番状況が分かるというのはもちろんのことですが、末野原交流館も兼ねられるのかどうかという話になります。支所長がたまたま1館1支所であれば直結するんですけど、複数館ある場合は難しくなってきます。例えば、猿投支所では井郷交流館、猿投台交流館、猿投北交流館、保見交流館が支所範囲ですので、交流館と支所を機能的に分離をした方がむしろ良いのではないのかと考えております。それから、地域会議などを5つも持つ支所長が、館長も兼ねるとどうしても自分の業務の守備範囲が幅広くなり過ぎてしまうので、分ける所は分ける考えさせていただきました。

具体的に連携強化については、情報は実際に顔を付き合わせるのが一番伝わり易いので、意見交換会が一番大事かと思っています。今も、地域会議の場に交流館職員が出ている所が多いのですが、極力そういう場に交流館職員が顔を出す、あるいは交流館の事業の現場に支所職員が顔を出すといったことをより一層進めて行きたいと思っています。

委員：高橋地区でも一つの支所に対して、交流館のエリアは3つに分かれています

高橋支所のあるコミュニティセンターに足を運ぶのは、高橋地区の戦没者慰霊祭の時くらいで、地域活動の場としては、ほとんど交流館1本です。コミュニティセンターの方は例えば、戸籍抄本、住民票等の市民サービスの場で、実際のコミュニティ活動は交流館に分業化されているのかと思っていますし、それで良いだろうと自分は思うんです。別の見方をすれば、旧高橋村の3集落を一つの地域という風に見る時代は終わってしまったと感じます。

事務局：従前の支所と交流館は、委員の言われたような役割分担でしたが、合併以後、住民が自ら地域の課題を解決するための支援をするためには、交流館だけではなくて、行政側の果たす役割ももっと出てくるだろうという事から、支所長や担当職員の配置などの機能強化を図ってきました。ですが、委員のご指摘のように、住民票ぐらいの用事で行く以外で支所には用が無いということ自体がむしろ支所が上手く機能していないことの表れのように感じます。行政の施策まで交流館職員が手を出せない部分もあり、交流館の果たす役割は、どうしても限界があります。例えば、過疎化の問題、集住対策、あるいは福祉対策などは行政の職員が直接手を出したり、地域住民の手を借りながら行政的な施策を展開したりという必要性がありますので交流館職員ではとても手に負えません。そこは交流館の守備範囲ではないと思いますので、その辺りは支所職員が中心となって縁の下の力持ちとなってやっていく部分だと思っています。

会長：交流館が地域の事全てをカバーするのではなく、困った問題は支所なり、行政なり、交流館なりで対応するといった事が必要ですね。

事務局：交流館が産業振興を担うという話が出ましたが、今の交流館職員で地域の産業振興を担うというのは難しく、産業振興の基盤をつくるために、人材が必要だとなった場合、そういう人材を育てていくきっかけを作る事を交流館はある程度手助けできると思います。地域でどういう産業を振興するのは政策的に決定する事で、そういうものは支所が中核になって地域の意見とか資源を集約して市の産業部に上げていき、それが施策としてフィードバックされる話しになると思います。そういう意見の集約をするのが支所職員だと思っています。市民があまり支所・コミュニティセンターと関わりを持たれていない現状を見ると、豊田市が目指すところがまだ十分浸透していないというか、歩みが遅遅として進んでいないという事を感じました。

交流館活動の事例について、早川委員が猿投台交流館と旭交流館との交流事業に関わっておいでですので、今日はお話をしてもらいたいなと思っています。

- 早川委員 説明 -

会長：大変暖かいお話しをいただきました。事務局から何かありますか。

事務局：現在、地域活動を支援する交流館に向けての取組という事については、事務局としても一定の活動をしているかなと思っています。ただし、交流館活動を支援する人をより活かすための新たな仕組みの検討など、今後の課題もあると認識しています。そのほかの課題事項について、ご意見をいただきたいと思っています。

委員：調査報告の中で、交流館のサポートチームみたいなものを住民の中に作れないかという提案をしましたが、それが実体化しつつあるのだと思います。交流館では、意図して作っていないと思いますが、住民側が力を付けてできてきたのだと思います。サポートチームを意図的に作ろうとしてもできるものかどうか難しいところです。地道に活動されていく中で力を付けて来られた方々が交流館を自分で使い始めて、交流館を支えていきましょうというのが本来だと思います。そうしてできたサポートチームの事例を情報として流すことが、啓発にもなるだろうと思います。更には、例えば交流館としてはある程度任すという事をして良いのではないかと思います。主事から活動をお願いできるような関係ができていくと活動の範囲が広がって行くでしょうし、負担も軽減していけるんじゃないかと思います。課題のうち、もう一つは、既に検討いただいているようですが、交流館の運営体制の見直し・待遇の改善です。

もう一つは、先程、産業形成と言いましたけど、職員が全部やるという事ではなくて、システム機構の中で上手く回していける仕組みができないかという事でもあります。主事さんたちが全部やるのでなくて、調査研究機能を使いながら場として交流館を使っていけるような関係を作っていけばどうかということです。旧市街地の色々な問題を抱えた地域に対しても、交流館という場を上手く使うことが求められています。本来は、住民の方々が自分たちお互い様という関係の中で、色々な問題を解決できる所まで行くが一番良いのですが。何かをしてもらって当然という関係になってしまうと上手くいかなくなってしまいますので、何かをしてもらって申し訳ないとか、ありがたいので自分もどこか誰かにお返ししたいと思っていただけるような関係ができてくると一番良いと思います。その関係を上手くつなぐということが交流館には求められていると思います。

会長：ありがとうございました。それでは、交流館の運営体制の見直しについて、事務局から説明をお願いします。

事務局：資料をもとに説明

会長：とりわけ給料の見直しをしっかりとやっておいてください。

事務局：直ぐに辞めてしまう人が多い要因として、土日の勤務が多いとか、業務と処遇が見合わないなどが考えられますので、主事の専門性に見合った処遇が必要になってこようと思っています。

会長：調査研究機能をもたせたセンターについてですが、今はセンターを特に設置することなしに調査研究を行っています。たまたま、東高跡地で（仮称）文化交流センターの設置が議論されており、このなかに生涯学習のための調査研究機能を取りこんではどうかと思います。

委員：私は市民文化センター整備基本構想市民会議のメンバーですが、会議の中でも、生涯学習機能について議論にはあがっています。ただ、細かい内容は詰まっています。

委員：大学機関に援助を求めることはできないのですか。

委員：大学などの研究機関が入るのは倦厭される場合もありますし、むしろ、豊田市が生涯学習推進のための組織を持つという話で良いと思います。調査研究をするための窓口となる組織があって、その都度必要であれば大学など研究機関に委託を出すというしくみの話なのでそう考えていただきたいと思います。ただ、組織としての拠点は欲しいですし、もしできればちょっとした場所も欲しいところです。

事務局：建物ありきではなく、機能ありきの話というのはもちろんのことです。いずれにせよ、まだ構想段階なので、はっきりしたことはいえない状況です。

委員：給与の見直しは指定管理の見直しに合わせるために、一年先延ばしすると聞いたのですが、来年はどうなりますか。

事務局：役所内での内部調整があり、明言はできませんが外郭団体の経営を所掌する人事課とのやりとりの中で、ある程度今の交流館職員の状況や、今後、今のままの状態が続くとかなり困難な状況になるという所までは理解されています。交流館職員の待遇見直しは、他の指定管理施設や協会・公社への影響がありますので、暫定的な部分は今年度から実施しますが、来年度継続して総合的に考えることとなりました。

委員：先程、益富、若林の方でネットワークづくりの話がありましたが、社会福祉協議会のボランティア連絡協議会、こちらと市民活動センターのつなぎすとなどの関連性や位置付けを教えてください。

事務局：ボラネットは数年前からありますが、このところ余り機能していなくてゆるやかな状態でした。市民活動センターが今年3月に、市民活動情報サイトというのを新たに立ち上げ、これを契機として再度、社会福祉協議会、トヨタボランティアセンター、あすて等との情報共有のネットワークをもう少し強化しようとしています。つなぎすとは、今年度10名程認定を受けましたが、様々な活動団体をコーディネートしたり、会議の場でファシリテートしていく人材です。ある程度の専門性を持った民間の方たちを登録して要請があれば派遣をしていくというような形を取りつつあります。

会長：様々な所で交流館と関わりがあるなど再認識をしました。次の2つ目の交流館図書室のあり方の検討について事務局お願いします。

・交流館図書室のあり方の検討について

事務局：資料をもとに説明

委員：2月の末に社会教育法の改正が閣議決定され、今度国会に社教法改正が提案されます。大きな改正ではありませんが、学校教育の要請に応じて、社会教育施設が支援するということを含めた策定です。学校図書館に司書教諭が置かれることになって以来、さまざまな方たちが読書指導員等々の名称で活動するようになりました。学校の中の図書館活動が豊かになると同時に住民の方々も子どもたちと一緒に本を読むなどの活動を通してとても力をつけていらっしゃると思います。豊田市は住民の方たちが力を付けて来ている典型的なまちだと思います。そういう住

民の方々の力の活用が大事で、こうした方々をどのように位置付けるかが一番難しいことです。生涯学習課が市長部局に移ったという事も、学校との連携の位置付けを難しくしています。

人口10万人規模の都市は、60から80年代にかけて公民館と図書館を分離して設置してきました。また、名古屋市でも区ごとに図書館を作って、同時に社会教育センターを作るという形で、完全に図書機能と分かれた形で展開してきました。豊田市の場合は交流館の図書室というのが残っていて、幅広い市民が交流館の図書室を活用し、大事な施設として存在しているので、そこをちゃんと位置付け、交流館の複合的機能を残していくことがいいと思います。ですが、交流館の中の6名の主事さん方は、業務も幅広いですし、異動もありますし、十分図書を使いこなしていただくだけの力量をつけるのは難しいでしょうから、どうしても市民の方々の協力を必要とすると思われます。中央図書館とも連携する中で、交流館の図書機能をちゃんと把握して、本を整理したり、読書指導したり、子ども達の読書の大切さを援助できるような、そういう力量をどこかで育てる必要があると思います。今年度、委員さんのお知恵を借りながら、高めていきたいと考えています。

委員：小学校の調べもの学習で図書を利用するとき、団体貸出は中央図書館に依頼して、中央図書館まで本を受け取りに行かないといけないしくみになっています。交流館で返せるシステムはありますが、一学年で3クラスが借りるとなると、冊数が150冊とかになるため、今の交流館体制では人間的にも物流的にも難しいとのことです。交流館で学校もボランティアも含めて一緒に図書に関する相談ができたり、小学校の図書館司書が交流館へ行って図書の吟味をするような連携がもてるとそれぞれの活動に厚みがでてくると思います。また、交流館に図書館の相談員みたいな人材が居て、地域密着型で図書に関する活動をしてくださると、色んな所でボランティア、交流館、中央図書館、地域の交流館に来た子どもさん、親御さんの読書相談にも乗れますし、図書館にも連絡ができるようになると思います。図書専門的な位置付けの人間が交流館に一人みえるだけで交流館はすごく変わるのではないかなと感じます。ただ、図書の事は、子どもと関わってこないと見えてこないところがありますし、実際に子どもと本の事だけでもすごく沢山の知識なり経験なりが必要になってきますので、図書に関する専門員まで、交流館職員がやろうとすると、大変だろうと思います。豊田市には子ども読書や、子どもの本に関わっている人が多くいらっしゃるの、そうした人材の活用も期待できると思います。

会長：交流館の本の購入の代金というのはどういう形ででてくるのですか。

事務局：中央図書館が一括購入し、交流館図書室に分けています。

会長：県内で一番沢山本を買えるのは豊田市で、とても恵まれているなと感じますので、あとはいかに利用していくかだと思います。

委員：豊田市は予算がありますから、住民がリクエストをするとその本は買ってくれ

ますが、流行の本が集中すると全部買ってしまうので、同じ本ばかりになる可能性があります。ある意味で、本を選ぶという事自体がとても大事な住民の力です。大変かもしれませんが、交流館ごとに少しずつでも選書機能をもたせることは、住民の力量を育てるということにもつながると思います。

会 長：今年、青年の主張で総理大臣賞を貰った美里の女の子は、図書館でも有名なくらいすごく沢山の本を読んでいるそうです。だから豊田市には、良い本もあるし、やる気になればいくらでも勉強できるのですが、全体的な傾向では、図書離れ・読書離れが著しいですね。図書に関わる市民層が地道な活動をされる中で読書への道を拓いてくださるとありがたいですね。学校教育との関わりはどうか。

委 員：図書館への学校教員の配置などで、中央図書館と学校との連携はすごく良くなりました。学校と交流館の部分はまだこれからかなという感じがしています。

委 員：中央図書館でも住民を育てる研修をやりますが、それを少し交流館に依拠した形でやって地域人材を育てたり、郷土資料を大事な資料として継続的に保存していくことが都市内分権を進めていく大事な土台になると思います。

会 長：最後に副会長の藤嶋さんに締めていただきましょう。

副 会 長：本当に一年間ありがとうございました。特に、東海北陸社会教育委員研究大会では、900人を超える参加者のなかで、松浦さん、久米さんに豊田市の事例発表をしていただき、ありがとうございました。また、私は足助地域からこの会議に出席させていただいていますが、今年度は合併した町村の事についてほとんどの時間を使っていたいただきましてありがとうございました。

3 連絡事項

事務局より連絡

保見交流館長より、保見交流館の概要説明